

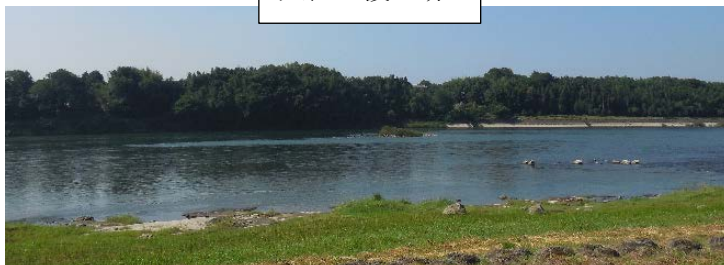
14 日目 太田-9.3Km-鵜沼- ---17.4Km- ---加納

7月 31 日、午前 8 時、太田宿(美濃加茂市)のホテルを出発、まず木曾川の大田橋まで戻り、そこから中山道ウォーキングをスタートする。 天候は晴れ、予報は最高 38 度!

太田の渡し跡

太田の渡しと岡本一平

太田の渡しは、河川の増水などでたびたび中止になったことから、中山道の難所の一つとされ、「木曾のかけはし、太田の渡し、碓氷峠が無くばよ



い」と当時の馬子唄に歌われた。 個人的には難所として和田峠を加えて欲しいが。

現在の太田の渡しには何も残っておらず化石林公園があり、日本ライン川下りの「遺跡」がある。化石林は、地面に木の化石が転がっているもので、化石が林立しているわけではない。日本ライン川下りは、太田から愛知県犬山市にある犬山橋下船場までの約 13km の木曾川急流を舟で下るもので、人気があったらしいが、事故があつて不人気となり、現在は営業していない。大田橋から川沿いに下ると「岡本一平終焉の地」の碑があり、何



の説明もない。どこかで聞いたような名前で、ネットで調べたら、昔の漫画家で、妻は小説家の岡本かの子、画家の岡本太郎(太陽の塔の)の父、池部良は甥、と書かれている。どうしてこの地(美濃加茂市)で亡くなったのかは分からなかったが、当地出身の坪内逍遥との交流が関係しているらしい。ネット情報では、浮気を繰り返す岡本かの子を岡本一平は愛し続けたとのこと、そうか、「かの子繚乱」のモデルだ。

太田宿 51 番目

堤防から、旧家の連なる町並みが見え、そこは太田宿、観光客用に整備されているが、早朝で旅人は少ない。まず目にはいった立派な旧家は旅籠の小松家、中を無料公開して休憩所になっている。白壁の綺麗な旧家は酒屋、本陣は門のみだが豪壮な構えの脇本陣は残っている。

本陣の門



旅籠小松屋



酒屋 御代桜



2階の屋根にまで上がる「うだつ」

豪壮な脇本陣、「うだつ」が2階の屋根まで上がっている



「うだつが上がらない」の「うだつ」は、普通、1階の屋根と2階の屋根の間にあるものだが、この太田宿の「うだつ」は2階の屋根まで上がっており、まるで屋根の両耳のようにも見え、派手で、遠くからも良く分かる。「うだつ」は富の象徴であり、この地の豪商は競って「うだつ」を高く上げたらしい。上写真の脇本陣の2階の「うだつ」は、端の鬼瓦が2重になり凝った作りとなっている。右写真の商家も「うだつ」を高々と上げており、こんな旧家が何軒もある。

「うだつ」を上げた旧家



坪内逍遙ゆかりのムクノキ

宿のはずれに大きな木があり、根元に説明板がある。坪内逍遙は太田代官所の役人の子供で当地にて出生、明治時代の文人として功なり遂げて大正8年に当地を訪れ、このムクノキの前で写真を撮った。

坪内逍遙ゆかりのムクノキ



大正八年に右のムクノキの前で写真を撮った



難読町名

木曾川沿いに、時には堤防の上、時には国道 21 号線を歩いて行く。左手の木曾川は日本ラインの名のように、巨岩巨石の中を流れているが、川原の樹木が多く、道路からは急流の写真撮影ポイントは見つからない。そんなところの地元の商工会議所の前に、写真の看板があった。皆さんはこの「坂祝町」が読めますか？ 私はもちろん読めなかった。

難読町名をウリにしているなんて楽しい。



猿”豚”城

木曾川が大きく左にカーブするところで真正面に急峻な山が聳え、その頂上に何か構造物のあるのが見え始め、段々大きくなり、建物の様にも見え始めた頃、上の写真の国道 21 号線の道路標識を見つけた。



猿豚とは面白い、きっとあの山の上の建物がそうだ、何かの言われがあるに違いないと考え、通りかかった人に、「正面の山の上の建物が猿豚城ですか」と聞いたら、「そうです、但しサルバミ城です」と言われ、標識を良く見ると豚ではなく、読みも Sarubami と書かれており、恥をかいてしまった。PC の特殊文字に啄の字はあるものの、標識の文字はなかった。ネットでは、「室町、戦国時代の城で、1565 年に織田信長の美濃攻めにより攻略され、川尻鎮吉が城主となり、その折に、地名をさるばみから勝山に変更とあり、面白い逸話はなかった、残念。



岩屋観音堂と「うとう」峠

岩屋観音堂



丸い石の供え物

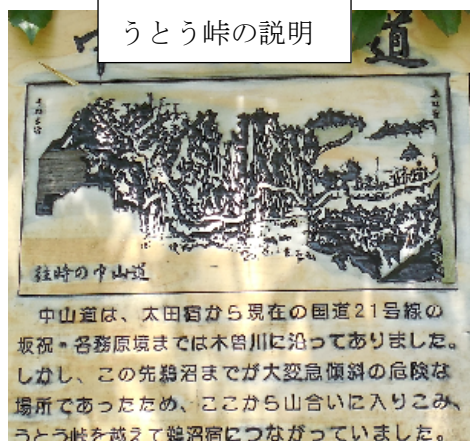


ものが供えてある。ネットで調べたが意味不明。ただ、

ネットによるとこの観音堂には円空仏があり、見落としたのは残念。中山道は木曾川・21 号線と別れて山の中へとはいっていき、標高 140m の「うとう」峠を越えると、人家の無い山中から一変して住宅地、更に降りると視界が開けて大きな市街地が広がり、各務原市の鶴沼となる。

中山道は木曾川沿いに 21 号線から山腹へ、また降りて 21 号線の繰り返しとなる。その山道に岩屋観音堂があって、お堂の前にダルマの様に丸い石を重ねた形状の

うとう峠の説明



鵜沼宿 52 番目

この宿場も旧家が並び、良く整備されている。宿場の入口には旧大垣城の城門があり、その前に旧家を保存した町屋館があり、復元された真新しい脇本陣は無料で見学可能で、その脇本陣は写真から分かる様に太田宿と同様の「うだつ」が2階の屋根まで上がっている。

旧大垣城の城門



町屋館



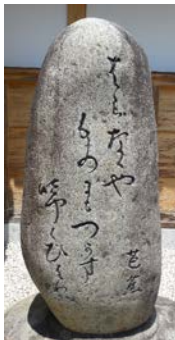
再建された脇本陣



脇本陣の横に芭蕉の句碑が四つある。右の「ふく志るも」句は楠の化石に彫られていたらしい。



ふく志るも
喰へは喰せよ
きく乃酒



はらかなや
ものにもつかす
帝くひは



汲溜の
水泡たつや
蝉の声



更科紀行首途之地
おくられつ 送りつ
果ハ木曾の秋

鵜沼宿の町並



鵜沼宿の中山道は旧家が続き、全体として黒っぽく見え、猛暑の日光の下、暑苦しさを感ずる。時刻は正午過ぎ、そろそろ昼食と考えるものの、宿場内には適当な店はない。50m程離れて国道21号が中山道と平行しており、家並の隙間から色んな看板が見える。そこにカレーのCOCO 壺番屋を見つけ、暑い時には熱いものをと、本日の昼食はポークカレー+サラダで1038円也。

ついにリタイア

中山道は国道 21 号と合流し、歩道はなく、車道の白線の外側を歩く。 気温は予報どおり 38 度に上がり、遮るものはない直射日光とコンクリートの反射、横を走る車の排気ガス、それに時折交差点で停車している車のエンジンの熱気が加わり、とにかく暑い。 ペットボトルの水をガブ飲みし、マジクールで首を冷やしても暑い。 1 時間程歩いて、小さな公園と木陰のベンチを見つけて小休憩。 塩飴を舐め、水分をとり再出発。 コンビニで買ったソフトクリームを舐めながら歩き、日陰で座れるところを探すが無もない。 また 1 時間程歩いて名鉄の小さな駅を見つけ、駅舎のベンチでまた休憩。 時刻は 3 時、鶉沼から次の宿場の加納まで 17.4Km、まだ半分程しか歩いていないが、気力が萎え、リタイアを決心。 その駅の路線図を見たが名鉄の支線であり名古屋までは乗換が複雑。 地図で最寄りの JR 駅を探し、高山本線の蘇原駅を見つけ、30 分程歩いて無人駅に到着、20 分程待つて乗車。 岐阜で乗り換えて名古屋へ、名古屋から近鉄で帰宅。 本日の歩数は 3.6 万歩。

太田宿

鶉沼宿

マンホールの蓋

太田宿(美濃加茂市)は日本ライン下りの船と舵を操る船頭さん、鶉沼宿(各務原市)は何の変哲もないデザイン、真ん中の菱形が市章。



14日目

